

## アレルギー・リウマチ科

### 1. スタッフ

科 長 (教 授)	箕田 清次
副 科 長 (准教授)	岩本 雅弘
外来医長 (助 教)	釜田 康行
病棟医長 (講 師)	長嶋 孝夫
医 員 (講 師)	永谷 勝也
医 員 (教 授)	岡崎 仁昭
医 員 (教 授)	吉尾 卓
病院助教	青木 葉子
病院助教	大西佐知子
シニアレジデント	5名

### 2. 診療科の特徴

平成12年4月1日をもって当科の診療科名をアレルギー・膠原病科からアレルギー・リウマチ科へと変更した。これにともないリウマチ患者の紹介数が増加している。

当科はアレルギー・リウマチ・その他の膠原病を専門にはするものの、同時に全身の管理能力も必要とされる。膠原病そのものが多臓器疾患であること、およびその治療法の多くが免疫を抑制するために合併症として感染症を引き起こす頻度が高いことが原因である。この全身管理能力は当科の最大の特徴であり、ただ単に膠原病の診療にとどまらない。全身管理能力の習得という点はレジデント教育において最大の到達目標であり、当科がもっとも力を注いでいるものである。

欧米に比べ約7年の遅れに甘んじていた我が国のリウマチ治療が、利用できる生物学的製剤の増加とともにようやく欧米並となった。現在までに当科で導入した生物学的製剤使用患者数は平成21年末の段階でレミケード247例、エンブレル229例、ヒュミラ53例、アクテムラ57例の計586例に及ぶ。その80%以上の患者で非常に満足できる治療効果が得られており、栃木県のリウマチ治療の改善に大きく貢献したと自負している。さらには臨床治験にも開発段階から積極的に関わり、より多くの治療困難症例のQOL改善に貢献した。

生物学的製剤による関節リウマチの治療には以前にも増して多くのマンパワーと時間を必要とする。生物学的製剤による治療を当科で多くの患者に実施できているのは県内各所の診療所との病診連携のたまものである。患者の紹介を受け、治療が難しい初期の段階の治療を当科が中心になって行い、安定した段階で連携施設での治療へ移行する。大学附属病院の役割は緊急事態に備えることであることから当科でも低頻度ながら併診を行っている。そのことで患者は診療所と大学という利便性と安全

性という両面を確保できている。患者にも十分納得が得られ、また少ないマンパワーの当科においても、治療困難な重症例に注力することができた。

ジュニアレジデント教育に関しても力を注いでおり、他の内科では行っていない外来研修を取り入れている。新患をまずジュニアレジデントが診察し、患者の問題点、鑑別診断、検査計画などを短時間に把握させ、その後、教授または准教授が教育 (precept) しながら患者を診察する方法である。入院患者の場合はすでに診断が下されている症例が多く、短時間に患者の有するさまざまな問題点を把握するという訓練を行うチャンスが少ないことを補う目的である。

平均在院日数の低減は昨年と同程度の達成率を得ることができており、長期にわたる入院でしばしば遭遇するQOLの低下を防ぐことができていると信じている。リウマチ膠原病は一般的には平均在院日数が多い診療科である。当科の平均在院日数である14～15日は全国レベルでも最も少ないレベルである。

#### ・認定施設

日本リウマチ学会教育施設  
日本アレルギー学会教育施設

#### ・認定医

総合内科専門医	箕田 清次 岡崎 仁昭 岩本 雅弘 長嶋 孝夫
アレルギー学会指導医	岡崎 仁昭 吉尾 卓
アレルギー学会専門医	箕田 清次 他4名
リウマチ学会指導医	箕田 清次 吉尾 卓 岩本 雅弘 長嶋 孝夫
リウマチ学会専門医	箕田 清次 他7名

### 3. 診療実績・クリニカルインディケーター

#### 1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数	979人
再来患者数	12,887人
紹介率	55.6%

## 2) 入院患者数 (病名別)

関節リウマチ	217人
全身性エリテマトーデス	80人
シェーグレン症候群	44人
強皮症・CREST症候群	43人
多発性筋炎・皮膚筋炎	17人
血管炎症候群	38人
混合性結合組織病	25人
成人Still病	13人
ベーチェット病	11人
リウマチ性多発筋痛症	9人
高安動脈炎	3人
薬剤アレルギー	5人
その他	18人
総数:	520人 (重複あり)

## 3) 手術症例病名別件数

胸腔鏡下肺生検	3件 (呼吸器外科)
---------	------------

## 4) 治療成績

## 5) 合併症例

## 6) 死亡症例・死因・剖検数・剖検率

間質性肺炎	3人
ニューモシスチス肺炎	2人
肺炎	1人
出血性ショック	1人
敗血症	1人
原疾患 (強皮症)	1人
計	9人 剖検なし

## 7) 主な検査・処置・治療件数

腎生検	12件
皮膚生検	24件
筋生検	10件
肝生検	3件
神経生検	2件

## 8) カンファランス症例

## (1) 診療科内

- 4月9日 肺高血圧、間質性肺炎、溶血性貧血を伴う自己免疫性多腺症候群
- 5月21日 帯状疱疹ウイルスによる髄膜脳炎を合併した関節リウマチ
- 6月4日 関節破壊の強い透析アミロイドーシス疑い症例
- 7月23日 汎発性モルフェア疑い
- 11月5日 白血球減少を伴ったベーチェット病
- 11月19日 ループス腎炎の抗凝固療法について
- 12月17日 肺高血圧症を合併した強皮症

## (2) 獨協医大アレルギー内科との合同カンファレンス

- 5月29日 難聴と大動脈炎を合併した一例
- 11月6日 胸鎖関節痛を認めた長期維持透析患者の1例

## (3) 病棟看護師との合同カンファレンス

## (病棟連絡会)

5月までは隔月だが、6月以降は医師、看護師との連携を密にするために毎月開催した。

1月20日

3月17日

5月19日

6月23日

7月28日

9月15日

10月27日

11月16日

12月21日

## 4. 事業計画・来年の目標等

レジデント教育の更なる充実と若いリウマチ医の育成が喫緊の課題である。

また、リウマチ患者教育をさらに発展させるため市民講座を繰り返し開催すること、患者友の会とより緊密な連携を行うことなどを引き続き目標とする。